

私だけではないと思いますがクリスチャンになってから最もよく使うことばは「感謝する」ではないでしょうか？説教の後に賛美する福音讃美歌 4 1 3 は昔からよく歌われる曲ですがその中で「数えてみよ、主の恵み」と歌われているように、主がしてくださったことをひとつひとつ振り返ってみると、多くの恵みを見だし、主に感謝したくなります。また、「すべてが感謝でした。」と言う人もいるかもしれません。確かに神にあってはすべてが感謝なのですから、「すべてを感謝できる」というのは素晴らしいことです。しかし、それが、たんにキリスト教的な表現として「感謝でした。」と言うだけで、何がどんなふうに感謝なことだったのか、神が一体、私に何をしてくださり、私はそのことによって何を学んだのだから、ひとつひとつ振り返って心に留めることがなければ、それは、ほんとうの感謝と言えないかもしれません。

「ほんとうの感謝」と言いましたが、「ほんとうの感謝」があるのなら、「にせの感謝」もあるのでしょうか。あります。今朝の聖書の箇所にも、「にせの感謝」が出てきます。ここは、イエスが語ったたとえ話のひとつで、ここには、二人の登場人物が出てきます。ひとはパリサイ人、もうひとは取税人です。パリサイ人と取税人は、まるで正反対の立場にある人でした。「パリサイ人」というのは、ユダヤの宗教の伝統を厳格に守っている人たちで、その多くは学者であったり、ユダヤの国会の議員であったり、また、民衆の指導者でした。ここに登場する「パリサイ人」も、さぞかし、立派な肩書きを持ち、地位も名誉もあった人だったでしょう。一方の「取税人」というのは、当時ローマ帝国の属国になっていたユダヤの国で、ローマの役人に雇われて、ローマのために、同じユダヤ人から重い税金を取り立てていた人々のことです。取税人たちは「敵国であるローマに魂を売った」として、他のユダヤ人から反感を買っていました。それに、取税人のほとんどは不正を働いて私腹を肥やしていましたから、多くのユダヤ人から軽蔑されていました。取税人の多くは、金の力で、回りの人々を見返してやろうとしたのですが、しかし金によって心の平安を得ることはできませんから、その心には絶えず罪の責めと、不安と、孤独とがあったのです。このパリサイ人と取税人の二人が同時に神殿に行きました。そしてそれぞれに祈りをささげました。パリサイ人は何をどう祈り、取税人は何をどう祈ったのでしょうか。二人の祈りを比べ、そこから「ほんとうの感謝」とは何なのかをということを学んでみたいと思います。

まず、パリサイ人は何を、どう祈ったのでしょうか。11 節に「パリサイ人は、立って」祈ったとあります。神殿の庭には、椅子などありませんから、みんな立って祈るのです。取税人も立って祈っています。13 節に、取税人が、「目を天に向けようともせず」祈ったとありますが、パリサイ人のほうは、きっと、胸をそらし、天を仰いで祈ったのでしょうね。そして、両手をまっすぐに上げて祈ったことでしょうか。聖書に「男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい。」

(テモテ第一 2:8) とあるように、立って、天を仰ぎ、手を伸ばして祈るのは、当時の祈りの姿勢で、決して不自然なものではありませんでした。そして神様に感謝をささげています。しかし、パリサイ人のこの姿勢には、彼の傲慢な思いが表れているように思えます。パリサイ人はこう祈っています。「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。」(11 節) パリサイ人は、「神よ。…感謝します。」と祈っています。確かに彼の心は自信と満足に満ちていたことでしょうか。彼は「感謝」という言葉を使っていますが、これはほんとうの感謝でしょうか。彼は、自分よりも劣っていると思える人々とくらべ、自分がいかに立派であるかを、誇っているにすぎないのです。パリサイ人は「私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではな

い」と言いましたが、ほんとうに、彼は、誰にも親切にし、完全に正しいことをしていたのでしょうか。パリサイ人は、他の人とくらべて、あんな悪いことはしていない、こんなこともしていないと言い、堂々とその手を神に向かってさし伸ばしていますが、はたしてその手はほんとうに清く、その心もきよいものだったのでしょうか。パリサイ人は神の前での自分の姿、自分の心を深く見ることをしないで、表面を人と比べて、自分の正しさを誇ったのです。それが彼の感謝の内容だったのです。つまりパリサイ人の祈りは神に向かっての祈りではなく、人に向かう祈り、人を非難する祈りでした。パリサイ人は「ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。」と祈りました。パリサイ人は神に祈っているというよりは、祈りを使って取税人を非難していたのです。これは、クリスチャンが時として陥りやすい罪です。たとえば、夫婦喧嘩の時に、ご主人が奥さんのために祈りながら「このどうしようもない女の罪を赦してあげてください。」などと祈り、奥さんもご主人のために「この頑固で罪深い亭主が悔い改めますように。」などと祈るとしたら、それは、祈りの中で相手をけなしているだけであって、お互いのために祈っていることにはなりません。

パリサイ人の祈りは、また、偽善の祈りでもありました。彼は口では謙虚に祈りながら、心の中では「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」(12節)と、自分の「立派で、敬虔な」生活を誇っていたのです。不信仰が、心とことばの不一致であるなら、信仰とは、心とことばが一致することであると言うことができます。ローマ 10:10 に「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われる」とあります。心がことばと一致する時、また、ことばに心がこもるとき、そこに信仰が生まれ、救いが起こるのです。

「口で告白して救われる」とありますが、この「告白する」という言葉には「同じことを言う」という意味があります。告白は、また、心にあるものと同じことを話すことです。心にあるものを覆い隠さず、神の前に正直に語ることです。心に不安があれば「私には不安があります。」と、神に祈れば良いのです。思い煩いがあれば「私には思い煩いがあります。」と祈り、怒りやねたみを抱くことがあったなら、それも正直に神の前に言い表わせばいいのです。真実な神に、ことばとところの一致した真実な信仰を祈り求めたいと思います。

次に、取税人の祈りを見ましょう。取税人の祈りの姿勢は、パリサイ人とは違っています。パリサイ人は胸をそらせて天を仰いでいましたが、取税人はうつむいて祈りました。パリサイ人は手を天に向かって指し伸ばしましたが、取税人はその手を胸にあて、自分の胸をかきむしるようになって祈りました。パリサイ人は目を天に向け祈りましたが、その目は神を見つめてはいませんでした。しかし、取税人の目は天に向けられてはいませんでした。神を見つめていました。神を見つめていたからこそ、取税人は、自分の罪を知り、自分の惨めさを見ることができたのです。そればかりでなく、悔い改める者に向けられる神のあわれみをも、その信仰の目で見ることはできたのです。また取税人は、自分を「罪人」と呼びました。パリサイ人は心の中では、「私はゆるする者ではございません。不正な者でもございません。また姦淫する者でもございません。私は週二回の断食を守り、収入の十分の一を神にささげております。私は、真面目で、正しく、道徳的、宗教的で神への義務を立派に果している人間でございます。」と、自分の正しさ、立派さを、神の前に長々と並べたてました。しかし、取税人は、たった一言、「こんな罪人の私をあわれんでください。」としか祈っていません。取税人は、パリサイ人のように長々と自分のことを申し開きをしていません。自分を「罪人」と呼んで悔い改めの祈りをささげているのです。

聖書は人間の罪を教えていますから、教会では、すべてのことを、私たちが罪人であるというところか

ら出発します。ところが、時代と共に人々が聖書の教えから離れていくと、教会でも人間の罪について教えなくなり、「すべての人が罪人であると教えるのは、人間をいやしめることだ。」と考えるようになってきました。「罪」が教えられなくなり、したがって、罪からの救いも語られなくなってきたのです。しかし、聖書が人間を罪人だと言うのは、人間をいやしめて言っているのではなく、人間が神のかたちに造られた素晴らしい存在であり、ひとりひとは、この地球全体よりも価値あるものだからです。人間が、神のみこころを理解し、神に従うことも逆らうこともできるほどの存在であるからこそ、罪人となったのです。人間に罪があるということを教えるのは、決して、人間を低く見るのではなく、人間の素晴らしさ、尊さ、その価値を認めればこそなのです。別の言い方をすれば罪が分からないなら人間は他の動物と変わらない存在となるということです。

聖書が教えるように、人間が罪人であることを、心の底から認め、悔い改めを体験していないと、クリスチャンもまた、教会の中で、パリサイ人のように、自分と人とを比べたり、人と人とを表面のことで比べたりするようになります。人間の価値をそのように表面で判断するところから、差別が生じ、教会の中でも、この世的な価値観が横行するようになってしまうのです。

取税人のように「こんな罪人の私」と言って、神の前に出たいと思います。その時、神の恵みが私たちに届きます。イエスは言われました。「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」神は彼の過去の罪をゆるしただけでなく、神が彼を、その悔い改めにもとづいて、これから歩むべき正しい生活へと導いてくださったという意味がこめられています。罪のゆるしは、神のすべての恵みの出発点です。神の前に自分を低くして歩み、絶えず罪のゆるしを体験し、そこから来る神の恵みを感謝する、そのような週でありたく思います。